



2009年

**SORA** 27号

金魚玉 (27)

— 2

柴田 佐知子

茅の輪とれ神々の闇降りてきし

守るものなくて自在や猛暑来る

蓮の葉の隙間も見せず揺れにけり

釘抜きに釘曲り出る日の盛り

直進を暑しと思ふ直情も

父の息入れて真赤な浮袋

帆が走る沖の一線ラムネ抜く

浮袋つけて海へは入らぬ子

## 夏帽子

秋 千 晴

子燕の舌の奥まで餌を待つ  
 収納の少し歪みて夏帽子  
 高下駄の旋律のごと梅雨に入る  
 青楓眺むる方を上座とす  
 飛魚の干物の翼焦げてをり  
 籐寝椅子雲の流れに乗つて行き  
 夏祭一塊の氷届きたる  
 解体の埃も音も大暑かな  
 花氷見知らぬ人と話しをり  
 桃の香の箱よりあふれ届きたり



皆既日食が見られた日は、丁度お茶の稽古日でした。先生宅への途中、小学生、エプロン掛けのお母さん、縮シャツに短パンのお父さん、腰の曲がったおばあさん等、にわか煎餅のお面の観察メガネで代わる代わる空を眺めておられました。「見えますか」と声を掛けると中学の子が「ほら」と言つてメガネを貸してくれました。「ワー見えますね」と感動してその家族の中に入り込んでしまいました。それから先生宅の縁側では先生が黒紙に穴をあけて白紙に写してくれて皆で囲んで「ワーワー」言いながら感動しました。茶道以外の事で一体となつてより親しくなった感じでした。夕方帰ってきた主人も「見たね、皆既日食」が第一声でした。

私が幼い頃は七夕、蛸狩り、花火など近所の大人たちに見守られながら楽しんだものでした。今日は昔の絵日記を回想した一日でした。

## 遠慮

あさなが捷

すかんぼや筋を通せば生きにくし  
 横顔にて拒まれてをり濃紫陽花  
 成就せぬこひの顛末夕端居  
 敷石のいづれも濡れて解夏の門  
 八月やむかしは深く考へず  
 帰省の子すこし遠慮をしてゐたり  
 弟に命令口調鬼やんま  
 夕映えや案山子は肩を怒らせて  
 何ごとにも動じぬ母や実山椒  
 からす瓜柵乗り越えて来たりけり

息子の通う高校の国際交流委員をやっている関係で七月十三日から・韓国の高校生のホームステイ受け入れをしました。

事前に人から、韓国ではお皿を持って食べるのは行儀が悪いことだとか、お土産をもらったときその場でお礼を言い、次に会ったときにもお礼をいうことは、又欲しいと催促していることになる、などと習慣や文化の違いについて脅かされました。

幸いなことにやつて来たふたりは礼儀正しい素敵な男の子でした。お互い儒教の国だったのでびっくりするような違いはなく、言葉はほとんど通じなかったけれど楽しい三日間を過ごすことが出来ました。

ご縁があつて、昨日まで存在すら知らなかった高校生に出会え、彼らがお隣の国で元気に生活し、これから立派に成長していくと思うと、何かしら心が温かくなります。

ところで今回私が一番驚いたことは、当地に引越してきて十七年間、一度も片づいたことのなかった我が家がスッキリと整頓されたことです。

家を綺麗に保つ為にはお客様をときどきお招きすることをお勧めします。



# 月光

小林 朱夏

空蟬の無限の刻を授かりし  
 香水をつけて他人となりゐたり  
 サーフアーを鵜呑みしてゆく土用波  
 百八を越ゆる煩惱蟬しぐれ  
 盆の客次の客来て帰りけり  
 とんぼ捕り君はどこの子歳いくつ  
 かりがねや北枕して問ふ吉と凶  
 正面に国会議事堂敬老日  
 秋の日や洗礼のごと鍬洗ふ  
 月光に晒されてゆく母郷かな

・昭和二十年八月九日・

その日、十七歳の母は小学生の妹と墓掃除の帰りだった。今日は飛行機が飛はないなと思つているとピカッと稲妻のようなものが走つた。よく晴れているのに変だなど大村の方を見ると、一機の飛行機が飛び去りその後に、白い雲があがるのが見えた。新聞には「長崎に新型爆弾投下、当方の被害少なし」との短い記事が載つた。しかし母の家では記事より情報が多かつた。①母の父親は当時、国鉄駅に勤務しており、新型爆弾による負傷者が大村の海軍病院に収容できず多くの人が早岐駅に送られ、夏休み中の早岐小学校にはこぼれていること。②母は早岐小学校に動員されたが、負傷者の傷口の蛆を竹べらで落し赤チンを塗るほか何も無かつたこと。そしてあまりの凄惨な状況に女性はどう来なくてよいと言われた。母たちが八月九日の新型爆弾が原子爆弾で、被爆地は未曾有の世界であつたことを知つたのは、八月十五日の敗戦放送より後のことだった。

母の在所はハウステンボス（当時は針尾海兵団）の近くで、この話は、今年の桜のころ、母から初めて聞いたことである。

金魚苑実耶

日焼の子靴を忘れて帰りけり  
毒喰ひて大見得切りし夏芝居  
炎帝や道たづぬるに人影なく  
山笠や形よき殿闊歩せり  
梅雨明けの敷布に糊を効かせけり  
泣きながら母にすがる子汗いとど  
立ちすくむ風に揺れる蛇の衣  
飛び込みてプールの雲を崩しけり  
輪の中に幼子入るるキャンプの火  
夜遊びを答めてをりし金魚かな



・バンザイ？・

たとえばテレビの相撲中継の仕切りの時間は、力士のむこうの客席に見知った顔を捜したりして、中心のものより脇にあるものを見てしまう。

WBCの優勝の時も、東京都議員選挙の当選の時もそうだった。みんな「バンザイ、バンザイ」と嬉しそうに突っている手は、武器など何ももっていないと、手の平を相手に見せる「降参」になっている。耳の横にあげた手を向かい合わせるのが「万歳」の本当のやり方。

衆議院選の時、また少し気にしながら当選風景を見た。

# 麦 笛

高倉恵美子

野苺を摘んで持ちゆく回覧板

麦笛や男独りを通したる

どの家も留守ばかりなり実梅落つ

歪なる胡瓜ばかりが地を這へり

食べ物のあふれて楽し芙美子の忌

遠出せぬ友多くなり竹の花

生垣の長き生家や毛虫焼く

畑より西瓜抱へし頃の父

夏川に暴れ込みたる神輿かな

藁切包丁出して切りたる大南瓜



今年の高菜漬けは入院していた為、何も出来ずにごうと気になつていた。病室の人ともよくその話をした。高菜に対しての塩の分量を書いたメモを嫁に渡していたのだが、嫁も不安らしく来るたびに尋ねる。私の夫と二人でようやく漬けたと聞き安堵した。お母さんが退院する頃には食べられますよと言う。退院して早速食べてみるととても美味しく出来ていた。私が入院している間夫が漬物の桶に汁が溜まらないようにと毎日拭いていたようだ。几帳面な夫らしいと思う。近所の人たちにも配って食べてもらった。そろそろ私の出番も終りにしてもいい頃かもしれない。

## 盆の入り 樋口みのぶ

花柄のはなの中なる夏帽子

ひとつづつ星の増えゆく茅の輪かな

ひとり来て夜の茅の輪を潜りけり

焼きたてのパンは厚めに巴里祭

山笠<sup>ヤマカサ</sup>走る天空も地も水びたし

裏木戸にこゑをかけたる風鈴売

残されて男ひとりの昼寝かな

鯛や日のあるうちに湯浴みして

暮るるまで雀の遊ぶ盆の入り

浜風に髪立ちあがる盆踊



銀杏ちる空を真青に母逝けり

服部早苗

「空」二十五号に掲載された句です。  
この句を目にした時、思わずあーと声をあげました。抜けるような空の青さと銀杏紅葉の並木道…それは母の葬送の日と同じ情景でした。

辛かった日々がいつしか懐かしさに変わり、あの日のあの色を詠みたいと思っても、なかなか納得のいく句になりませんでした。勉強させていただきました。

# 銭葵 青山 悠

梅干して庭がすつぱくなりけり

父の日や鴉ばかりがよく鳴いて

梅雨深き最終バスの尾灯かな

叱られし牛の眇や銭葵

修験者の法螺貝怖き祭の子

波音や平家官女の落し文

媛神の島の滴り沖晴るる

朝顔届く朝顔市の入谷より

おとなしく山羊つながるる秋隣

秋立つや島に来てゐる旅役者

・牛蛙・

石炭産業が盛んな頃、実家の近くに小さな炭鉱があり、夕陽に円錐状のぼた山が浮き出るのが美しかった。俳人の竹下しづの女さんが住んでおられた粕屋農学校も近かった。ある年の初夏の頃、村に奇妙な噂が広がった。炭鉱のそばに溜池があり夜毎低い獣のような妖しい捻り声が聞こえ、村人は「池の回りの青葙に何か妖しいものが潜んどるげな」と夜が来るのを怖がった。後にその正体は食用として日本に移入された牛蛙であった。

私が県の農務課の出先で事務を執っていた頃、「これは美味しい吸物だから試食して」と言われ、食べ終えるとどんな味が聞かれた。「鶏肉」と答えると、「それは食用蛙だよ」と言われた。何も気付かず、私は牛蛙を食べたのである。



特別作品

## 茅の輪

河隅恵子

茅の輪結はれゆくや恵みの雨の中  
茅の輪結ふ縄新し鎌新し  
足かけて結へる茅の輪や白袴  
裁ち屑を払ひて立てる茅の輪かな  
茅の輪青し淀の雨水したたらせ  
夏 祓 鴉 翔 ち た る 枝 雫  
御手洗に御祓の水かぎりなし  
大幣のお初はゆづる茅の輪かな  
茅の輪くぐる抱かれて一重瞼の子  
茅の輪まで子供にうれし潦